

そのころ、残されたまきとゆきは、みのでした。

ケードのつきあたりまで、きてしまったていました。まゆみは、とうとう、アーほかに、入り口がちつちやく白く、光つうしろを振り返りますと、もう針の穴「いつたいどこのお店なのかしら」

「アーカードのずっと先からにおつてもないのです。不思議なことに、やつぱい、いいにおいは、どのお店のおいですいのところでもみきのかいだ、あのあまか目につきます。にもかかわらず、ふんにも、おかしを売っているお店はいくつたどりつきません。たしかに、右にも左いけどもいけども、においはどこにも「おかしいなあ」

「やつてくるようです。した。においはずつと奥から風に乗つて、みきはアーカードをまつすぐ、歩きまが聞こえていました。かりで、どのお店からもいせいのいい声ドがあります。アーカードはできたばかりに、たくさんお店の並んだアーカーふんすいからさほどはなれていないとおいを、ゆつくりとたどりだしたのです。かかとを浮かすと、そのあまい、いいにぱりさつきとおんなじように、ちよつとして、ちよつとぴり鼻を突き出して、やつんすいのふちから、とびおりました。そ「そういうと、みきは、びよいつと、ふすごく、あまいにおいがするわ」

「さあ、急いで戻ろうつと」



した。つた道を、やみくもに、走りだしたので「そういうと、みきは、すでに街灯の灯るわ」

「とにかく先に、森へ到着する必要があらだつて入つていやしいのです。きのおなかには、あまいものはひとかけつたのではないのもまた、事実です。みつたのです。それに、お八つを食べに帰おいの先にはあまいおかしなんて、なからないでしょう。でも、けつきよく、にそれは、まあ、あやしい、といわねばなとりじめしたくなかつたかと問われればいのは先にある、と思われのおかしを、ひまつたのは事実ですし、そのあまいにおあまいにおいにつられてここまできてしたのでないのを証明すること、です。ひとつだけ、自分がお八つを食べに帰つ

「みきの心配事は、こうなつたらたつたにおつてきません。すつかり消えてしまつて、どこからも、だしました。もうさつきのにおいなんて、ようやく立ちあがつて、ゆつくりと歩きさつきより伸びたとわかると、まゆみはとひとこと、いいました。影が目立つての、大きな土管によりかかつて、ぽつり「みきはひとり、草の生い茂つた空き地「迷子になつちやつたんだわ」

「まきとゆきは、向かいあつて、そういきつとお八つを食べに帰つたんだ」も、見当たらないのでした。てみました。けれど、みきの姿はどこに駅のおそばの建物にはかたつぱしから入つなく探しましたし、お便所のありそうなつちこつち、探しました。駅の中もくまいのです。もちろん、まきとゆきは、あいつこうにみきが帰ってくる気配がなしきりに後悔していました。きをひとりで行かせなければよかつたと、